

質疑応答

○質問 静岡県の浜松盲学校より参りましたナルミヤと申します。ショプラー先生にぜひ伺いたいことがございますので。先ほど TEACCH の基本理念に視覚的な手がかりを用いるということが挙げられていましたが、現在盲学校でも自閉症と知覚障害をあわせ持っている生徒がおりまして、現在その指導で大変悩んでおります。これまでの指導の中でそういった生徒の事例がありましたら、ぜひどういう経過をたどっていったのか教えていただきたいと思います。

○司会（寺崎） はい、ありがとうございます。ショプラー先生。

○ショプラー おっしゃるとおり、その認知の、知覚の問題とそれから自閉症の問題が重なっている子どもたち、特に私どもの経験で何人かの弱視の子どもを持った経験がありますが、自閉症も兼ね備えている子どもたちに対して、ビジュアルな視覚的なヒントをより大きく、わざと大きく拡大して、何とか見えるようにしたことが何回かありました。しかし、そういった完全に盲人で、自閉症の子どもでそういった大きな、非常に大きな知覚的なヒントなるものを使っても、それがやはり見えない場合には、やはり何らかの触覚的な、さわることによってわかる何かを使う、あるいは点字を使うことに頼らざるを得ないと思います。御自身の学校で何か異なったものを使われましたか。

○ナルミヤ 音楽が割と好きな生徒なので、メロディーに合わせてこちらの指示を伝えたりということをやっています。

○ショプラー いいことだと思います。ありがとうございます。

○司会（寺崎） よろしいでしょうか。

○ナルミヤ ただ、現在うちの生徒は不登校の状

態にあります。で、家庭訪問を続けているんですが、そのようないろいろ手だてをやってもなかなか変わってこない生徒の実態がありまして、そういった不登校の状態にある生徒に対して何か有効な手がかりがあれば教えてください。

○ショプラー そうですね、学校を通してよりも、親とかあるいはファミリーを、家族を介して直接その子どもと親などを介してやりとりをするということがあると思います。我々の場合はそういった個別指導を、I E Pを家族が使えるように、その個別の子どもに対してその評価をして、そしてこの個別教育プログラムを立てて、個別教育プログラムを家族自身が使っていけるようにいたしました。例えば今おっしゃったような音楽の好きな子どもであれば音楽を使って、それを家族にそういった個別教育プログラムを立ててもらい、個別個別教育プログラムを立てて、それを家族が家庭で使ってもらおうという形をとったりします。

○ナルミヤ ありがとうございます。

○司会（寺崎） はい、どうもありがとうございます。ほかにはございませんでしょうか。

それでは質問票の方が入っておりますので、そこからお尋ねしたいと思います。鳴門教育大学の橋本先生の方からの御質問です。ショプラー先生にです。一つ、TEACCH プログラムは自閉症児の認知機能を高めているのかという御質問です。あと二つございますけども、一つ一つ解決していった方がいいかと思いますので、よろしくお願いします。

○ショプラー 午前中にお話ししましたような、そういった構造化されたものを使って、その児童が学習をして、その作業を通して認知能力を高めていけるわけです。

○司会（寺崎） できましたら、橋本先生いらっしゃいましたら、これでお答えよろしいのか。

橋本先生いらっしゃいますでしょうか。直接お尋ねした方がいいかと思えますけども。

○橋本 徳島県の鳴門教育大学の橋本です。第2の質問ですが、先生がなされている施設、もしくは関連施設での自閉症に対する薬物療法、先生は講演の中であまり薬物療法はほとんど使われてないというお話だったように思いますが、一つはてんかんの合併した場合に対して、それから第2点目は行動異常に対して、それから第3点目は強迫的な行動に対して、それから第4点目は、非常に自閉症児の場合、非常に不安感とかそういうことが強いと思いますが、そういうことに対してどうしても対応できない場合、どのように対応されているかということでございます。

○ショブラー そういった子どものそのさまざまな状況やそれぞれの問題に対してのそういった問題でどうするかということ、そして薬物の使用にかかわる御質問でしたが、私どもが使うことのできる精神薬理センター、薬物療法クリニックがございまして、そこが、私どものセンターがその精神薬物療法クリニックを活用することができるわけですが、そのようなてんかんの場合、あるいはその行動としてもうほかに選択肢がとれないような場合にはやはり薬物を使っています。しかし、この構造化した教授法、教育法によりまして、大部分の場合はほぼいろいろな問題のうちの9割の、90%の場合はそれがそういった問題に至らなくて済むと、薬物を使わなくて済むと。恐らく全体のうちの薬物を使わざるを得ないようになってしまうのは10%の状況だと思います。最近その薬理的に、そういう薬物を使うことが支援をしている中でどういう形の影響を及ぼすかという研究・調査を行いました。そうしますと、その子どもが発育して、成長して成年になる。そうするとさらに薬物を使うとか、思春期になるとさらに薬物を使うようになったり、あるいはてんかんやひきつ

けが増えるということがわかりました。あるいは予測のできない行動をとると。したがって、私どもでは、時間の限った形で必要に応じて使っております。

○司会（寺崎） よろしいでしょうか。じゃあ3点目をお願いいたします。

○橋本 もう一つお伺いします。TEACCH プログラムでは視覚的機能を利用した方法を中心にプログラムを組まれてトレーニングに利用されていますけども、そうした場合に聴覚機能を用いた情報を同時に入力するということは視覚情報の処理を阻害する可能性があるかどうか。例えば、絵カードを提示してその内容、ごく簡単に明瞭に単語だけで同時に情報を提示した場合、児がより困難を起こすかどうか。

○ショブラー いいえ。同時に、例えば特にその移行期の子どもに対しては、その絵とともにその言葉を、実際の言葉を使ったりするということを行ったりします。かつては、過去においては両方を使うことは子どもにとってかえって害になってしまう。そのサインや、あるいはその絵をそれ話すことと同時にやることによって、その話す能力に対して影響を与えてしまうというようなことが言われておりましたが、しかし、そうではないことがわかりまして、特に移行期の子どもに対して同時に使っております。

○司会（寺崎） 佐々木先生お願いいたします。

○佐々木 御質問ではなくて、私がお答えした方がびんとくるかなと思うところがあるので。

この18年間の間に私は13回ノースカロライナを訪問しております。短いときは1週間で、長いときはVTRの撮影などがあって6週とか長く滞在したことがあります。恐らく皆さんがイメージしていらっしゃるような行動異常の人に出会ったことがないです。それで、けれども、かつて行動異常を示したというふうに説明を受ける人は、たくさんいらっしゃる。特に比較的大きくなってノースカロライナにほかの州から移住してこれ

るとか、それから大きくなってから TEACCH のプログラムに入るとかというふうな人の場合には大量の薬を飲んでる人がいますが、ほとんどが4週とか8週とか、12週とかというふうなうちに薬がいなくなるんですね。先ほど行動障害があるとき、それから強迫行動があるとき、その他どうしようもなくなるときと、こういういろいろお話ありましたが、それは本当はすべて同じことだろうと思います。基本的には、自閉症は不安が強いとおっしゃいましたが、構造化がうまくいけば不安はなくなるんですね。要するに環境の意味がわかるということがまず大切です。それから環境的の意味がわかるということと同時に、周りの人が自分に向かって提供する情報の意味がわかることです。話し言葉がわかりにくいというふうに思えたら、話し言葉と一緒に、例えば彼らがピクチャーディクショナリーという言い方をしていますが、視覚的な辞書をつけて提示するということがあります。ですから、周囲から言われていることの意味がわかる。わからないような言い方をしないように、よく訓練を受けたスタッフが伝えると、こういうことがあります。

それから、自閉症の人が自分から今度周囲の人に言いたいことがある場合ですね、それは、だけと言えないと。例えばコミュニケーションのサンプルをとるといいう言い方を彼らはよくしますが、この人は一体何を言いたがっているかということを目ざろりサーチをするわけです。こういうことを言いたいときにはこのように私たちに伝えてくれればわかりますよという、易しい伝え方を、今すぐ実行できる伝え方を教える。そうすると環境の意味がわかりますし、自分が伝えたいことを伝える方法がわかると、こういうことがあります。そうすると不適応ということは基本的には減っていくわけです。要するに適応ということは周囲で言われていることとか、周囲の環境の世界的意味がわかることです。それから自分がそこで実践、実行したいことを実行できる、そうしますと基本

的には不安はうんと軽くなるわけです。例えば構造化ということは、目の不自由な人が点字ブロックの上を歩くというのによく似ているわけですね。というより、視覚障害の人にとって点字ブロックは構造化です。そうすると、まちを歩く不安がずっと小さくなるでしょう。それと同じことを自閉症の人にどうしてあげるといいかということを経験して、創意工夫することが構造化のアイデアがあります。そうすると、適応がしやすくなれば、適応しやすくなれば不安が減りますから。

私は精神科の医者ですが、強迫行動というのは不安を解消するための一種の代償行動ですから。ですから、その分だけ薬物療法にしる何にしるやなくなるわけです。けれども、例えば10%ぐらいの人が難しいとおっしゃったのは、TEACCHのスタッフはどういう言い方をするかということ、まだ自分たちには十分にこの人に安心感を与えるほどに構造化のアイデアをまだ考え出せないでいるのだと。もう少し工夫がいるんだという言い方をするわけです。そういうときに仕方がないから、その分を薬で手伝ってもらおうということはあるかもしれませんが、大量飲んでいてよその州からやってくるとか、TEACCHのプログラムに入る前にたくさん薬を飲んでいたというような人は、例えばてんかんの治療をするのは、これは別ですけども、ほとんどなくなります。これは本当に現実でね、この中にも TEACCH に留学した人を含めて短期の研修に行った人はたくさんいますし、おびただしい数の学校や家庭や施設をたくさんの人が見たでしょうけども、私たちが簡単にはパニックと呼ぶような激しい行動異常の状態を目撃した人はほとんどいないのではないかと私は思っています。こういうお答えがわかりやすいかと思うんですね。どうでしょうか。

○司会（寺崎） あしたの講師の佐々木正美先生でした。先生またあしたもよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

そのほかに先生方、日ごろ困っていることとか

…はい、どうぞ。

○五十嵐 初めまして。子どもの生活研究所から来ました五十嵐と申します。トレーニングという意味合いで構造化されている中で自閉症の方はすごくわかりやすいと思うんですよ。

○司会（寺崎） 恐れ入ります。どの先生…お三方の先生方ですか、御質問は。

○五十嵐 お三方に。それで、すいません。それで有澤先生がおっしゃっていた、幼児のころは遊びを通す人間関係が重要だっておっしゃいましたよね。そのことでちょっと遊びとか、やはり自閉症の方って一緒に遊ぶのが難しいと思うんです、僕。それでやっぱり自分で余暇を過ごすこととか生み出すようなことがすごく難しいんじゃないかなと僕は見て思うんですけれども、そういう何か遊びの部分とか余暇の部分というのはノースカロライナの方ではどういうふうにとらえて、何ていうのかな、教育とはまた違うと思うんですけれども、援助しているのかなというふうに、影響を与えているのかなと。どのような影響を与えているのか、具体的な何か実践か何かで通して教えていただければありがたいと思うんですけれども。

○司会（寺崎） はい、わかりました。それでは遊びとか余暇について。

○ショプラー 大変いい質問をいただきました。おっしゃるとおりでありまして、自閉症の場合には余暇を楽しむということが非常に難しいということで、余暇についてもやはりその他の社会的な技能を教えるのと同じように、これをIEPの中で教えていく必要があります。

○エッケンルード では、私の方からその具体的な事例についてお話をいたします。こちらのノースカロライナの場合で言いますと、3歳までと就学前の施設の方に入ってきて、その中でこのいろいろな教育を行うわけなんですけれども、その際に教室の設定としては先ほどスライドでお見せしたような形ということで、その中で1対1で遊びの技術を教えていきます。例えばブロック遊びを

しなさいと言ってブロックを渡しても、それはできませんね。ですから、そのときにやはり視覚的なきっかけをつくってあげて、視覚的に構造化して教えてあげるようにします。それでこのブロック遊びの仕方が子どもがわかるようになりますと、今度は自分でブロック、このプレイエリアの方に行って一人で遊ぶことができるようになります。それからそのほかのおもちゃについても同じことが言えます。一つ教えてあげたからということになります。それからシャボン玉なんかもそうなんですけれども、シャボン玉をつくるにはこうやってやるんだよ。このシャボン玉をこうやってやると壊れるんだよというふうに教えてあげて、視覚的な教材を使って行っています。

○ショプラー それからまた、もうちょっと年長者になった場合、もう少し年が増してきましたと、例えば野球なんかをしたいということになるわけなんです、野球を教える場合にもそのままのルールではなかなか難しいという問題があります。そういう場合には、その子どもたちの持っている問題点に照らして、どこを変えればやりやすくなるだろうかということを考えます。例えば野球で言いますと、三つストライクでアウトというふうになりますけれども、この3ストライクというのをやめてヒットが出るまで打っていいという形に変えてあげるんです。そうすれば自閉症の子どもでも野球ができます。このような形で年長者の子どもたちであっても楽しむことができるように、余暇の過ごし方を教えてあげます。

○有澤 あと、私が申し上げたのは就学前の施設のね、先生が遊びを通してそれを中心に行っているといったことでね、実際に自閉症の子どもでもその就学前に他者との遊びができるような段階まで育って小学校に入ってくる例というのはあまりないんじゃないかなと。実際に私が見た子どもでも、やっぱり小学校に入ってからやっと他者を意識して、いわゆる三項関係ができ上がって、やっとう意図的なかわりの中で人との遊びに入ってい

って人間関係がわかっていくという段階のことが多いんじゃないかなというふうに思います。やっぱりそれまではもう本当に自閉症の子どもの遊びは、もうそのおもちゃそのものの遊び方じゃないようなね、いわゆる感覚的な遊びであるとか、ひとり遊びが多いというのが実際のところだと思いますので、そこに他者がどういうふうに入っていて、その同じ遊びのおもしろみみたいなものを共有して関係をつくっていきけるかというのが一つポイントじゃないかなというふうに思っています。その辺はやっぱり小学校段階に入ってから、同じ年齢の集団の中で意図的にやっぱり学ばせていかないとなかなか難しい状況じゃないかなというふうに感じています。

○司会（寺崎） 五十嵐先生、よろしいですか。

○五十嵐 うちは、子どもの生活研究所と申しますと、あの石井哲夫 がいるところなんですけども、そこでは割と小さいお子さんでもたくさん遊びが上手な方がいらっしゃるんですよ。職員とも交流が大分深いところまでいっているんですけれども、その TEACCH も似たようなことをしている、同じなんだなというのがわかったのによかったと思います。どうもありがとうございました。

○司会（寺崎） はい、どうもありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。それじゃ先生の方から、はい、お願いいたします。

○藤崎 成田市の就学相談をしている藤崎と申しますが、時々、月にいっぺんぐらい自閉症児をお持ちの親御さんとお母さん方と勉強会などをしていんですけど、そこでよく話題になるのが、じゃんけんの勝ち負けが教えられないと言っているのですね、お母さんが。きょう有澤先生のお話で、じゃんけんの勝ち負け、あのくらいですとわかったら大したものだなというような気がしたんですけれども。それから、勝ち負けというのを、いろいろな遊びに、ほとんどついてますよね、勝ち負け。それから運動会なんかをやると、勝とうという気持ちがないらしくて、じゃあ勝ち負けという

ような概念は、勝つとうれしいんだというような概念はなかなか自閉症の子には教えることができないんじゃないかっていうふうに私は言っているんですけども、その辺のことはどういうふうに考えたらいいでしょうか。

○司会（寺崎） 3人の先生方にですか。じゃあ3人の先生方。

○有澤 あの表は一つの例としてお示したんですけどもね、確かにおっしゃるとおり自閉症の子、なかなかじゃんけんできませんね。普通にやらせると大体相手のをまねして同じのを出していつまでたっても決着がつかないというパターンが多いんですけども、その前の段階でやっぱり一つの型に決めさせるというので、私なんかはやっぱりカードみたいなもの、ペープサートみたいなやつでグーとチョキとパーが書いてある絵で、事前に1個選ばせて、それだけこうやってカードで出してやるじゃんけんみたいなことから、だんだんじゃんけんのルールを理解させて、数多く経験させる中である程度じゃんけんというものがわかってきますね。勝ったことによって何が得られるのか。勝てば何か自分の好きな活動ができるとか、例えばグループのときに勝った人が日直ができるとかね、その日直でみんなに号令かけてあいさつができるとか、何か一つの役割を得られるとか、そういうその子が理解できるような賞、メリットがあればだんだんじゃんけんの意味もわかってくるんじゃないかなというふうに経験では思います。

○ショブラー 今のお話の中で、この勝ち負けの考えがわからないと楽しめないというような前提があったと思いますけれども、これはちょっと違うと思います。私たちの場合でいいますと、子どもの場合にはたとえ負けたとしても、そのゲームをやることができたということだけで非常に楽しむことができるということで、やはりここではこの技術、つまりそのゲームをすることができるようになるんだという、その部分までのところに、非常に大きな喜びがあると思います。

○藤崎 勝ち負けというような概念はそんな、あまり教えようなんて思ってもちよっと難しいということですかね。そこまでは突っ込んでやらなくてもいいんじゃないかということですかね。

○ショブラー もちろん、社会の中での適応ということであったならば、勝ち負け、覚えなきゃいけないかもしれませんが、でも楽しみのためにやるとしたら勝ち負けということがわからなくてもいいんじゃないでしょうか。

○藤崎 わかりました。

○司会（寺崎） はい、よろしいでしょうか。はい、どうぞ。

○須田 ショブラー先生にお願いしたいと思います。私、日本自閉症協会の副会長の須田で、あした話題提供する者なんですけど、実は大きくなった人たちの中でも、また小さくても「なぜ」とか「どうして」とかという、相当適応がよくなって行動も安定しているのに、人から何か質問されたときに「なぜ」とか「どうして」とかという、そういうことに対する答えが非常にできない子が多いんですけれども、例えば何にも犯罪をしないのに間違っって捕まえられて、警察に連れて行って説明しようと思っても、オウム返しするからやったことになってしまっちゃうとか、そういうような問題が非常にあるんですけど、そういうことはショブラー先生のところにはないんでしょうか、あるんでしょうか。あったとしましたらば、それをどういうふうに対処したかを教えていただきたいと思います。

○ショブラー 同様のケースは私もいろいろと目にすることがございますが、それに対処するプログラムとして一番いいと思うのは、スペインで行われているプログラムがありまして、それは自閉症に関して警察の方々に学んでもらうということです。警察に対してトレーニングをするというもの。これはその地域社会においてその自閉症に対してもっと、より理解を持ってもらう、そして自閉症の人はこういう反応の仕方をするんだ

などということをよりよく理解してもらうという点で、とてもいいものだと思います。そうすることによって警察とのいろいろな外渉的なトラブルも防ぐことができます。同じようなものがノースカロライナでもあるんですが、しかしやはり、どうしてもそれだけでは十分ではなくて、その警察の方で誤解をしたりする問題が生じることがたまにあります。したがって、その警察に対してももっとその自閉症に関してよりよく知ってもらうということが重要かと思います。

○須田 初めに御質問の、「なぜ」って聞かれてなかなか答えられないことに対して、先生の方では絵とかそういうことで対話させるのか、それともある程度単語でうまく出させる方法というのがあったら教えてほしいんですが。

○ショブラー 今の話はその理解ということに特に関係がある話だと思うんですが、それは理由だけではなくて、時としてはその何か、あるいはいつかということさえもなかなか理解してもらえない状態も存在します。しかし、その中で私も社会的なソーシャルストーリーを使います。例えばキャロル・グレイが使っているようなものであり、そのストーリーを、社会的なストーリーを使って初めつくったのがキャロル・グレイですけれども、社会的なストーリーを使ってその状況を理解してもらおうと。そしてそれをさらにビジュアルな、視覚的な形で明確に理解してもらおうようにします。そういったストーリーは反復、繰り返すことによって、そういった理由を問うような「なぜ」というような問いかけに対する理解、理解度が増しています。しかし、自閉症の人の多くにとりましては、その点はなかなか長所とすることができず、なかなか強い点とはならないわけでありまして、やはりその就業の場におきましてそのような問いかけに直面する、対決するような局面のない職場において、やはりそれは自閉症においてはそういった問題に対しては非常に対処するのが難しいのだということも言えます。

○須田 本当に先生のおっしゃるとおり本当に難しいなって、最後に残ったことがそんなことが多々あるものですから、質問させていただきました。どうもありがとうございます。

○司会（寺崎） それでは先生、どうぞ。

○粟津 失礼します。京都府立盲学校の粟津といいます。今の話にもかかわるんですけれども、エッケンルード先生に質問したいと思っていたことと、今出てきたお話が関連するので、よろしくお願いします。講演の中のまとめのすぐ前にお話しされたソーシャルストーリーズということについて、もう少し具体的な例があれば教えていただきたいなと思っております。

○エッケンルード まずこのソーシャルストーリーということですが、これは「僕は」とか「私は」とかという形で一人称で書かれています。子どもがこれから経験するであろうさまざまな社会的なシナリオに対して、こういうことが起こり得るということを盛り込んで、前もってつくっておきます。例えば、その子どもがこれから水泳に行くということがわかっているとき、そのときには水泳用のソーシャルストーリーをつくります。そのときにはまず一番最初の段階に、まずこの場所を出てバスに乗る。例えば車に乗っていくんだ。その場合にはシートベルトをするよと。そして次に今度は着いたならば、今度は靴を脱いで、洋服脱いで、パンツを脱いでというふうに順番に、具体的にこれから起こることを記していくような形にしています。それからまた、このソーシャルストーリーの中には子どもたちが守らなければいけない決まりごと、ルールを必ず盛り込むようにしています。例えば、このプールにいるときには静かにしなくちゃいけない、プールの中で歩き回るときには静かにするんだとか、あるいはこのプールにいるときにはおもちゃを投げたりしちゃいけないんだというふうなことも入れています。そして、スケジュールをよく見て、その中で何が起こるのかということが子どもによくわかるようにし

ています。例えば、ローリーがこれで水泳はおしまいよと言ったらそれで水泳が終わるんだということを書きます。そしてその上で今度は洋服を着なくちゃいけませんから、先ほどの脱衣のときと逆さの方法で進んでいくわけなんですけれども、何を着て何を着て靴を履いてという形で持っています。それから、例えば大きな音がするようなものを扱うとき、子どもたちはおびえてしまいがちですけれども、そういう場合に備えるために、例えばヘアードライヤーを使いますね。そういう場合も備えた形でソーシャルストーリーをつくります。お話ししましたように「私は」とか「僕は」というふうに一人称で書くんですけれども、例えばその例で言いますと、水泳に行って髪を乾かすときにローリーが僕にドライヤーを使ってくれる。ものすごく大きい音がするけど大丈夫というふうなふうに書いていきます。それからまたこのような形で、例えばこの今、水泳の例を一つとってもそうですし、ありとあらゆる考えられることをすべて考えた上でこういったソーシャルストーリーをつくってまいりました。

それからまた、この適切な行動というのはどういう行動なのかということを示すためにもソーシャルストーリーを使います。例えば、教室の中で、ホールで、あるいはその他の場所においてどういう振る舞いが適切なんだよということを示すようなソーシャルストーリーもつくります。例えば、子どもたちはだれかが話をしているときに立ち上がったたり、これが不適切であるということがわからないために立ち上がってしまったりとか、あるいはだれかが座っているときに距離感を持つこということをしてしまうんです。そういうことも細かく、こういう場合にはこうだというような形で書いていきます。これは本当にすばらしいツールだと思っています。いろいろな場面で社会的な技能を教えるために使うことができます。このソーシャルストーリーを使うことによって不安を解消し、そしてまた行動異常等をどんどん減らすこと

し、そしてまた行動異常等をどんどん減らすことができています。

○ショプラー 今の御質問も今度、先ほどの御質問とつなげてみますけれども、例えばこのソーシャルストーリーの中に「なぜ」という質問を組み込んで練習するということも可能になります。例えば先ほどの水泳のこのソーシャルストーリーの話の思い浮かべていただきたいんですが、この水泳のストーリーの中で「僕」なり「私」なりがこの水泳をしに行くと。そのときに別の人物を設定してください。その別の人物がこの「僕」なり「私」なりに話しかけてくるんです。「なぜ服を脱ぐの」と言うんですね。そしてそのストーリーの中の「私」なり「僕」が答えるという設定にするわけです。そういうことを繰り返して勉強していくことによって、だんだん「なぜ」で始まる質問にも答えることができるようになります。このソーシャルストーリー、もともと一人称でつくってい

ますから、その中で自分が答えるのを体感していくことができるわけです。もちろん最初のうちはやはり「なぜ」と言われると、その「なぜ」の質問に対して反響言語が出てしまう、オウム返しが出るということは当然あると思いますけれども、そのうちだんだんこういうことかなということがわかってくるということもあると思います。

○栗津 ありがとうございます。

○司会（寺崎） 補足ですね、はい。

○東条 今のソーシャルストーリーのことなんですけれども、日本ではまだあまり紹介されていないキャロル・グレーなんですけれども、1999年9月…特殊教育研究所の東条ですが、去年の9月ですね、発行されたアスペルガー症候群という本の中にソーシャルストーリーのつくり方、一人称で書くとか、今言ったことがかなり詳しく書いてあります。東京書籍で発売で、トニーアトウッドの著書です。